復活節第４主日礼拝説教「羊を飼ってみる？」

日本基督教団石神井教会　2020年５月３日

【旧約聖書日課】イザヤ書　62章1～5節

1 シオンのために、わたしは決して口を閉ざさず
　エルサレムのために、わたしは決して黙さない。
　彼女の正しさが光と輝き出で
　彼女の救いが松明のように燃え上がるまで。
2 諸国の民はあなたの正しさを見
　王はすべて、あなたの栄光を仰ぐ。
　主の口が定めた新しい名をもって
　あなたは呼ばれるであろう。
3 あなたは主の御手の中で輝かしい冠となり
　あなたの神の御手の中で王冠となる。
4 あなたは再び「捨てられた女」と呼ばれることなく
　あなたの土地は再び「荒廃」と呼ばれることはない。
　あなたは「望まれるもの」と呼ばれ
　あなたの土地は「夫を持つもの」と呼ばれる。
　主があなたを望まれ
　あなたの土地は夫を得るからである。
5 若者がおとめをめとるように
　あなたを再建される方があなたをめとり
　花婿が花嫁を喜びとするように
　あなたの神はあなたを喜びとされる。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　21章15～25節

15食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上
にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛し
ていることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」
と言われた。16二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」
ペトロが、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と
言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。17三度目にイエスは言
われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、
「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あな
たは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておら
れます。」イエスは言われた。「わたしの羊を飼いなさい。18はっきり言っておく。あな
たは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとる
と、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」
19ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスは
こう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言
われた。

20ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟

子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、裏切るのはだれ
ですか」と言った人である。21ペトロは彼を見て、「主よ、この人はどうなるのでしょうか」
と言った。22イエスは言われた。「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたし
が望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」23それ
で、この弟子は死なないというう わさが兄弟たちの間に広まった。しかし、イエスは、
彼は死なないと言われたのではない。ただ、「わたしの来るときまで彼が生きていること
を、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか」と言われたのである。
24これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、
彼の証しが真実であることを知っている。
25イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一
つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。

主イエスのなさったこと

主イエスのご復活を祝った日（イースター）から四週目の日曜日、皆さんにインターネットのライブ配信などを利用した各家庭での主日礼拝に徹していただくようになって四度目の日曜日です。今日も、礼拝堂では、限られた奉仕者と礼拝を整えさせていただいています。このような歩み方に少しばかり慣れてきたところでしょうか。もちろん、日曜日の主日礼拝のために教会堂に集まらないというのは、ほとんどの皆さんにとって、これまでとは全く反転したような教会生活です。戸惑いも多いかと思います。けれども、この際ですから、わたしは、皆さんには一つのよい機会にしていただきたいと思っています。たとえば、日曜日に主日礼拝のために教会に集うことができないときにも、主日礼拝の前後の時間や平日に来堂して、ひととき祈り、また献金を預けて帰るという、もう一つの選択肢を、身に着けてくださったらよいと思うのです。

今日の福音書日課（ヨハネ 21 章）は、この福音書の最後の部分です。「あとがき」のような言葉が最後に記されています。「**イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある**」と、名残惜し気に述べて、この福音書は閉じられています。わたしたちは、他の福音書も知っていますから、「イエスのなさった、たくさんのこと」を知っているつもりでいますが、この福音書が言う「**まだたくさん**」は、それだけのことを指しているわけではないでしょう。福音書記者は、読者が福音書の伝える「イエスのなさったこと」を知ることだけで満足しないでほしい、という思いで、この言葉を書いているのではないでしょうか。

ヨハネ福音書は、弟子たちが湖で漁をするという日常生活に戻った中でご復活の主イエスとお会いし、食事の席で親しく主のお語りくださる言葉に耳を傾けたという逸話を、最後に加えていました。「読者のあなたも、自分自身の生活の中においでくださるご復活の主イエスを見る信仰に生きて、今このとき、主イエスならばどうなさったか、主に従う者としてどう振る舞うべきか、そのことをいつも問いながら、考えながら生きてほしい」。そういう願いを込めて、この最後の言葉が添えられることになったのではないかと思うのです。

「わたしの羊の世話をしなさい」

礼拝堂にいらっしゃれず、それぞれの家庭で主日礼拝をまもられている皆さんのことを想像しながら、礼拝を進めさせていただく中で、なお変わらずに聖壇に立たせていただいているわたしどもも、今まで通りのことをして済ませるわけにはいかないようです。

もちろん、いつもこの礼拝堂の会衆席を埋めてくださっていた皆さんのお姿を思い起こしながら、この礼拝を整える準備をし、また実際に執り行わせていただいています。それは、今までと変わらないことです。もちろん、四年ごとに巡って来る同じ聖書日課の定められた主日礼拝だとしても、前任地教会のときとはもちろん違うし、四年前の石神井教会とも違うのです。いつも、今そのときに一つの教会共同体として「キリストの体」の「肢体」となって連なってくださっている皆さんこそが、わたしどもの礼拝準備の大前提にある存在です。

それでも、今の「ライブ配信」礼拝で、実際にここにお集まりいただくことのできない中で礼拝を準備し、また説教者として語らせていただくとき、わたしは、いつもお見せいただいていた皆さんの姿だけでなく、この場で目に映ることのなかった方々のことにも、強く意識を向けさせられるようになっているのです。実際、インターネットを介してこの礼拝の動画をご覧くださる方の中には、普段なかなか礼拝においでになれない教会員の方や、一度もこの礼拝堂にお出でになられたことのない方なども含まれるのではないかと想像しているのです。

主イエスが、弟子のシモン・ペトロに最後繰り返し、「**わたしの羊の世話をしなさい**」と念を押されていました。ヨハネ福音書は、主イエスがなさったことを端的に「良い羊飼いとして、羊であるわたしたちを養い、守り、育ててくださっている」と描いていたと言ってもよいと思います（10 章参照）。その中の主イエスの一つの御言葉が、思い起こされます。「**わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない**」（10:16）という御言葉です。ペトロに言われた「わたしの羊を」の中には、この教会・礼拝堂という「囲い」の中にまだ入ってこられていない、ほかの羊たちが大勢含まれているのでしょう。今、この機会に、わたしたちは確かに、そのような方たちをも視野に入れた礼拝に、説教に、また教会に、変わることを求められている。

皆さんの中に、羊を飼ったことのある者は、ほとんどいないでしょう。母教会に「羊飼いになりたい」と言っていた友人がいましたが、実現しませんでした。それでも、「わたしの羊の世話をしなさい」と繰り返された主イエスの思いの深みを、想像することはできます。主イエスとシモン・ペトロとの間で三度繰り返されるやり取りは、それほど印象的です。

きっと、ご存じの方もいらっしゃるでしょうが、この三度繰り返されるやり取りは、実は翻訳に表れない微妙なニュアンスの変化が描かれています。「愛している」と三往復する言葉が、原語では二つの異なる単語で使い分けられているのです。特に意味の違いはないと言われますが、岩波書店訳（1995 年）では、「愛している」と「ほれこんでいる」とに訳し分けています。

「あなたはわたしに従いなさい」

その訳し分けに従って、主イエスとシモン・ペトロのやり取りを再録すると、こうなります。

「あなたは、ほかのひとたちよりわたしを愛しているか」、「わたしがあなたにほれこんでいることは、あなたがご存じです」。「わたしを愛しているか」、「わたしがあなたにほれこんでいることは、あなたがご存じです」。「あなたはわたしにほれこんでいるのか」、「ご存じですよね。わたしがあなたにほれこんでいることを、あなたは知っていらっしゃる」。

こういうやり取りを、どこかで聞いたことないでしょうか。「あなた、わたしのこと愛してる？」、「俺がお前に惚れて結婚したって、知ってんだろ」。夫と妻の役回りを入れ替えてもよいかもしれません。もちろん、これだけだったら、単なるのろけ話みたいなものです。ところが、夫婦の実生活であれば、これに一言加わるのです、「だったら、あんた、少しはこどもたちの世話をしてよね」と。

主イエスがシモン・ペトロに「**わたしを愛しているか**」と繰り返し問われたのも、同じように、主がシモンに期待することがあったからこそ、だったのではないでしょうか。ペトロに最後繰り返し「**わたしに従いなさい**」と呼びかけられた主イエスは、ご自分の始められたお働きを彼にも一緒に担うようになってもらいたいと願われていたのに違いないのです。そうとすれば、さり気なく「**この人たち以上に**」と言われた「**この人たち**」も、「**世話をしなさい**」と言われた「**羊**」の中に含まれる人たちのことだったのかもしれません。

もちろん、「**わたしの羊の世話をしなさい**」と言われても、どのような形で「世話」をするのがよいのか、どうすることが必要なことなのか、それは、一人ひとりの「羊」によって違うし、ときと場合によっても違うことでしょう。わたしたちが自ら「そうしたい」と思う世話が必要なときもあれば、大きな負担を背負い込むことになる世話が強いられるときもある。それは、子育てを経験された方、人を育てた経験のある方ならば、お分かりだと思います。そうでなくても、主イエスは、シモン・ペトロに言われたのです、「**あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる**」。

「主イエスの期待は分かるけれども、わたしは、自分の世話をすることで精いっぱいで、ほかの人の世話をすることなど、とてもできない」とお思いでしょうか。けれども、主イエスは、「**年をとると…行きたくないところへ連れて行かれる**」と敢えて言われてから、ペトロに呼びかけられたのです、「**わたしに従いなさい**」と。ほかの人のことは関係ありません。「**あなたは、わたしに従いなさい**」と、主イエスは呼びかけられるのです。大切なことは、「**どのような死に方**」をするか、なのです。どのように、死ぬまで主イエスに従い続けるか。どのように、死の床まで主イエスのなさったことを思い起こしながら「羊」のために「愛」に生きるか。そのようにして、わたしたちは、死のときを迎えるまで、神のご栄光を現す器としてお用いいただくのです。